

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺
印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語〔六〕

——一光老師二十七回忌——

後堂 門 原 信 典

「普照の序」⑤【鉄脊撐天】

(てつせきてんをささえる)

『其れ惟だ雪竇禪師は超宗越格の正眼を具して、正令を提掇し、風規を露わさず。烹佛煨祖の鉗鎚を秉つて納僧向上の巴鼻を頒出す』

五月二十九日は、瑞應寺二十九世大玄一光老師の二十七回忌でした。ご命日は七月二十日です。

二十七回忌を忍光忌とも云います。光を偲ぶという意味だそうです。その通り一光老師のご遺徳を偲び、報恩のお勤めとなりました。

私が講師で就任し数年経過した十二月の成道会の撰心の時の事です。

撰心は朝三時過ぎから坐禅

しかし私は、生涯修行道場に身を置き、不離叢林(修行生活を離れない)を貫かれた一光老師のゆるぎない坐相(坐禅の姿勢)こそ全てではないかと思うくらい心を奪われました。

【鉄脊撐天】とは、達磨大師のお師匠様である般若多羅尊者の坐禅の形容で「脊椎が鉄の棒のように真つ直ぐで、天を支えている」と云う表現です。当に、その通りの坐禅でした。

その坐禅をしている一光老師が私の背中、と言うより私の身体全体に入り込んだのです。撰心の最中ですから、睡眠不足で夢うつたつたのでしよう。しかしこの夢は、とんでもない夢でした。私の坐禅は私だけの坐禅ではなくなつたのです。

私は今、修行僧の指導者として後堂と云うお役目をいただいておりますが、何を伝えるかと云えば、この鉄脊撐天の坐禅しかないのです。

坐中の功夫は、自らの坐相(調身)の点検に次ぐ点検。永平広録のお示しにも「納身の坐禅は、直に須らく、端正正坐を先と為すべし、しかし後、調息致心す。」とあります。

私達の坐禅は身体と息と心を調えるのですが、道元禪師は手を組み、足を組み、そして背筋を伸ばし、真つ直ぐに坐ることが第一とお示しです。

それと同時に、私達の僧堂でのこの坐禅は、一個人の坐禅ではなく、お釈迦様から始まって、今日まで佛法をお伝えして来られた祖師の坐禅、そしてこの僧堂の過去現在未来の修行者の坐禅が、私達の坐禅の中身でした。

祖師とは、達磨大師の事を云う場合もありますが、坐禅を実践し、伝えてこられた歴代の祖の事。お釈迦様を含めて佛祖と云います。

その坐禅をいつたい何時まで続けられたいのでしょうか。私がまだ参禅者で通っている頃、一光老師に「これからどれくらい瑞應寺に通つて坐禅したら良いでしょうか」と尋ねました。老師は即答「まあ四十年だな」。一瞬私は「聞かなければ良かった」と思いました。

「超宗越格」のお答えでした。この「僧堂に四十年坐れ」という言葉は私の坐禅修行に對する意識をはるかに超えていました。私は私の思惑を無視するしかないのです。

【正令を提掇し】一光老師は「正とは一もつて止まる」とお示しでした。

「正令」は佛祖の正しい号令、法令。「提掇」はひっさげる。

雪竇禪師は佛祖と一つに成られてゐるからこそ、佛祖の言葉をひっさげて、誰でもどこでもいつでも、抵抗することなく佛祖の境涯と生き方をただけるように誓願され、この百則を示されたのです。

【風規を露わさず】風規は、風格や規則という世間の常識、決まり事。いわゆる駆け引きや損得などの比べあいという選り好みや世間的な価値観に振り回されない生き方を示されています。

【烹佛煨祖の鉗鎚を秉つて】佛を煮て祖師を焼く。「殺佛殺祖」佛を殺し祖師を殺す。或いは「超佛越祖」佛を超え祖師を越える。

鉗は金バサミ、鎚はつち。もともととは師家(指導者)が修行者を鍛える意味ですが、佛であらうが祖師であらうが真つ赤な炉の中にいれて叩いて潰してしまふ。雪竇禪師様は佛祖

と一つだからこそ、このような
激しい表現が出来るのです。

私たちは佛祖をはるか彼方
の存在に見て、自分と一つだ
なんて思いもしません。です
から雪竇禪師はありとあらゆる
手段で、佛祖をこっちに引
き寄せて下さるのです。

のです。

ご尊影に尋ねました。「あ
とどれくらいここで坐れば
良いですか」

「まだあと二十年だな」

この度は聞かなかった事に
します。(続く)

当山二十九世

二十七回忌法語

逮夜

鏡脊正身撐一天
功夫辨道忍光禪
恩師慈眼語玄旨
端坐叢林四十年

献粥

一陣清風匝法身
叢林共勵道心真
晚鐘密響酬恩望
古佛遺光面自親

巴鼻はつかまえてこ
ろ。牛を飼育する際
に、鼻繰りという道
具で鼻を先ず捉えま
す。修行僧のつかま
えどころを示される
のです。

鼻先をつかむ。私は一
光老師に鼻先をつかま
れてしまいました。向
上の道を歩むしかない

テレホン法話 〇八九七四一〇〇三三

禪のたより



◆ 放てば満てり

先日、町中にサルが出たとい
うニュースを見ていて、随分昔
に見たテレビ番組を思い出しま
した。それは、サルが箱の中の
餌をどうやって取り出すか？と
いう実験の番組でした。

サルの前には、サルの手が
入る程度の穴が開けられた透
明なアクリル板の箱が置いて
ありました。そして、その箱
の中には果物が数種類入って
いたように思います。サルは、
箱に開いた穴から手を入れて、
出来るだけ多くの食べ物を取
ろうと、ムンズとつかむので
す。沢山つかんだのは良いが、
今度は手が出て来ない。仕方
なくつかんだものを離せば、手
が出て来る。でも、やっぱり
食べたいからまた手を入れる。
するとまた手が出ない。そん
なことを何度も何度も繰り返
している間に、果物を沢山つ
かんでも取り出せないんだと
気が付いたのか、少しずつ取っ
て食べ始めるという映像であ

りました。

穴の大きさを考えもせずに、
一度で沢山取ろうとすると、
これが本当のサルの浅知恵かと
感じながら見ていたのを覚えて
います。

そして、ふと考えました。あ
のときのサルの行動は、サルだ
から笑って見ていたけれども、
同じ事を人間がやったら笑えな
いなあ。いやいや、気付かずに
やってしまっていることも、沢
山あるのだらうなあ。

現代人の私共には、捨てられ
ないことが沢山過ぎるほどある
ような気がしますが、いかがで
しょうか？

道元禪師さまは、正法眼蔵と
言う書物の中で、「放てば満て
り」というお言葉で、執着する
心を棄てなさいとお示しにな
り、執着を手放すことの大切さ
をお説きになられました。

コロナ禍になってから、キャ
ンプをする動画が人気を博して
いると聞いて、私もインター
ネットで検索してみました。す
ると、わざわざ不便さを求める

かのように、人里離れた山や川
に出かけ、足りないモノは現場
で調達したり作ったりしながら、
キャンプをする動画のシ
リーズが見つかりました。

木の枝や石を集めて、こんな
工夫をするだけで、キャンプが
楽しくなるなんて、へえ大した
もんだなあとか、普段の暮らし
で良からうに、ワザワザ不便な
所に行かなくても…と思ったの
ですが、同時にこんなことを思
いました。今の時代、便利になっ
て指先一本でも何でも出来てしま
います。欲しいモノがあればス
マホをポチッ。暑いとき寒いと
きには、エアコンのリモコンで
ポチッ。でも！誰もが皆、心の
何処かで満たされない何かを抱
えている。だからこそ、キャン
プの動画やテレビ番組に人気
が集まるのではなからうか…。
ほんの一時でも、その便利なも
のを手放してみることが、私達
人間には必要なのかも知れま
せんね。

心が満たされないと考えてい
る人は、思い切つて、便利な生
活、快適な生活から、少し離れ
てみてはどうでしょうか。キャ
ンプまでとは言わずとも、山間
の鄙びた温泉宿に泊まってスマ
ホを持たず、テレビも見ず、新

聞も読まずに過ごしてみませんか？あるいは自宅で一日二日、そうやって過ごしてみませんか？利便性から離れると、もつと心穏やかで、ゆつたりとした時間を過ごせるのではないのでしょうか。「放てば満てり」です。

高知県 浄真寺 伊藤正賢師
令和四年五月十一日～二十日

◆茶におうては 茶を喫し

瑩山禪師さまに、「茶におうては茶を喫し、飯におうては飯を喫す」というお言葉がございます。今日はそれについてお話をいたします。

四国と言えば、うどん県の異名を持つ香川県もありますので、四国全体がうどん好きのようには思われがちですが、実は我が家は私を含め皆が大の蕎麦好き。いつかは自分で蕎麦を打って家族に食べさせてあげたいものだというのが、二十数年来の夢なのであります。

そんな私の夢が叶う日がやって来たのが、数年前のことです。ある日、一人の他宗のお坊さんが坐禅をしたいと、我がお寺に尋ねていらしたので、坐禅会に加わられて半年ほ

どした後の茶話会の時、「私、蕎麦打ちをしています」と。蕎麦打ちをやってみたかった私にとつて、まさに渡りに船でありました。

さりとて、私一人で教わるのはもったいないと、同志を募つたところ、坐禅会の人を含め六名が集まつて、月に二回の「蕎麦道場」と銘打つ蕎麦打ち講座が始まりました。

蕎麦を打つには先ず、こね鉢に入れた蕎麦粉に少し水を回して、素早く混ぜながら捏ねて、蕎麦玉と呼ばれる塊りを作ります。次に、蕎麦玉をのし板に移して手で広げ、さらにのし棒を使って正方形になるように延ばしていきます。薄く均等に延ばし終わつたら、粉を振りながら八つ折りに畳みます。それを、同じ細さで切るように、定規なようなものを当ててリズムよく切ると、蕎麦の出来上がりです。

しかしながら、「言うは易し、されど行うは難し」とはよく言うたものでございます。幾度も手ほどきを受けながら、今度こそはと頑張るのですが、思い通りにいかないのが正直なところでありました。おぼつかない捏ねや延し、不揃いな

太さの蕎麦ですので、お蕎麦屋さんのそれとは雲泥の差です。ただ、ひとつ言えることは、皆で打つて、皆で食す、その満足感と味は例えようもないものだということです。

それから一年が過ぎ、それなりに格好はついてきたものの、出来栄はまだまだだと、蕎麦を打っていた時です。ふと、一番大切な事に気がつきました。「蕎麦粉と水と自分がひとつになつて、捏ねて伸ばして切つて茹で、水に晒してざるに載せ、いただく。それだけで良いのだ。ああしてみよう、こうしてみようなどという邪念を捨てて、丁寧に蕎麦を打つて、茹でて、晒して、いただく。蕎麦はそれだけで十分美味しいのだ」と。

すると「茶におうては茶を喫し、飯におうては飯を喫す」の瑩山禪師様のお言葉がスーっと胸に入り込んで、気持ちが楽になったのを覚えております。

私たちの日暮らしの中には、何かしらの悩みごとや心配ごとがつきまとうものですが、先ずは今日、今このとき、やるべきことを、やるべきように、丁寧に、つとめてまいりましょう。

高知県 浄真寺 伊藤正賢師
令和四年五月十一日～三十一日

◆僧堂の行持

衣替えの季節になりました。とはいえ先月の連休明け頃から、日が差せば夏のような気温で、日中はもう夏服にされていても多いかと思えます。四季の移ろいという言葉がありますが、冬の次はすぐに夏で、気候そのものが移ろっているかのような昨今です。それでも、この季節、裏庭にホタルが迷い込んで来たり、孟宗竹が生え終わり今度は真竹が生え始めるなど、身近な動植物の営みのリズムはすぐには変わっていないようです。

瑞応寺では、毎年夏と冬に九十日の期間を設けて正式な修行に励みます。修行自体は年中行っておりますが、この期間は新たに入門したり修了したりせず、それぞれが配役を頂いて、その役目を全うします。歴代のお祖師様方が連綿と伝えられた修行法です。特に夏の修行は、インドにおいて雨季の期間の三カ月、一定の場所に留まつて修行したことに始まる、お釈迦様の時代からの行持です。

普通は、行事というところを、僧堂（修行道場）では行持という。行というのはそのまま修行

の行で、持というのは持続することです。つまり行持とは、教えに従つて修行し、その修行を怠りなく持続していくことをいいます。瑞応寺では、どんな時にでも、常にこの僧堂の行持が修行されています。ですから、以前は一般の参禅者数名が、毎日午前四時からの坐禅に参加されていました。

私自身が修行僧として瑞応寺僧堂で指導を受けていた頃は、そんな参禅者をみて「毎朝四時に参禅に来られるほど坐禅が好きなら、お寺に来る時間も家で坐禅の方がいいのでは。」などと思つこともありました。ですが、いざ自分のお寺をひとり切り盛りすると、毎朝少し坐禅やお勤めをするくらいで、とても僧堂のような行持を行うことは難しく、僧堂を離れてみて、大衆の威神力とも呼ばれる、僧堂での修行が有難いことだったのだと感じております。仏祖の命脈である僧堂の行持が、いつまでも変わらず修行できることを願っております。

瑞應寺専門僧堂維那 吉松聖博
令和四年六月一日～十日



■当山廿九世廿七回忌法要

五月二十九日(日)、当山廿九世大玄一光大和尚の廿七回忌法要が行われた。前日の連夜諷經、当日の献粥諷經は門原後堂が導師を勤められ、正當諷經は、大本山永平寺監院小林昌道老師導師のもと厳修された。

一週間前より元安居者の方に

は、法要準備、山内清掃を始めとして尽力頂き、法要当日には、僧侶合わせて約百人を超える随喜衆により、無事円成の運びとなった。



正當 (当山二十九世二十七回忌法語)

廿七星霜輝一天 光明威震護龍淵

眞慈照鑑來儀處 定慧莊嚴拜祖前

恭惟山門今月今日 相値

大本山永平寺副賞首

當山二十九世重中興大玄一光大和尚二十七回忌辰

欽集現前清衆 嚴修進慕報恩法供養 所集殊勲上酬罔極深恩者也

伏惟 老和尚者

家風綿密 行持牢堅

洵識釣月耕雲 現佛身衆生開清眼

平生行道 慕先德兒孫潤心田

正當即今妙容不動法孫等仰底端的如何布宣

嘆

佛國山頭天地靜

綠陰深處祖燈傳

■夏安居入制

六月十四日(火)より、配役

行茶、入寺式、楞嚴会啓建等

入制行持が行われ、三ヶ月の夏

制中に入った。制中の第一座に

あたる首座は峯岡徳彦士(広島

県少林寺徒弟)が務める。

山内大衆乳水和合し、今制中

切磋琢磨・辨道精進し、仏道修

行の無事円成を誓願した。



六月の日鑑

一日 祝禱

七日 参玄会(九日迄)

十四日 配役行茶・首座入寺式

楞嚴会啓建

十五日 土地堂念誦・庫司点湯

祝禱

小参・人事行礼

十八日 略布薩

觀音講・勉強会

廿日 ベルモ二一合同慰霊祭

廿三日 略布薩



入寺式

白眉殿展示物



掃雪開松逵

七月の予定

一日 祝禱

三日 日曜参禅会

五日 参玄会(七日迄)

十日 惠光忌

十五日 祝禱・略布薩

十六日 筆供養・弁天大祭

十八日 觀音講・勉強会

廿日 大玄忌

廿三日 略布薩



鐘声

四月に上山し、一ヶ月半が過ぎました。一つのことができるようになったかと思えば、二つも三つも失敗する日々でした。多くの方から厳しくもあたたかい御指導をいただき、同安居の方とは、共に、学び合いながらやってきました。そして、この夏制中では首座の大役を頂きました。不安も多くありますが、少しでも多くのことを学び、身につけることができるように頑張っていきます。今夏首座